

紀要発行に寄せて

弘前医療福祉大学

学長 下 田 肇

弘前医療福祉大学が開学して本年は4年目を経過し、いわゆる完成年次を迎えることになりました。教員各位には心より感謝申し上げます。さて昨今、大学改革のあり方が各方面から議論されており、大学教育の存在価値—その目的は何かが問われております。

少子化に伴う定員割れの常態化、学力低下の元での教育内容、学生にとって満足度の低い授業、中退学者の増加の問題、グローバル化の中での変革の必要性等多くの問題が指摘されております。

大学教育の最大の任務はいうまでもなく、各々の専門性の質の高い教育を通して社会に貢献する指導的人材を社会に送り出すことにあり、教員の教育に対する意欲、熱意が問われております。

いまだ、19世紀のドイツ型の大学理念が日本の大学教育の中に成り立っており、社会の要求とかけ離れたミスマッチを生じさせており、従来の「学生は自分で勉強すべきで自主性に任せる」という建前に教員が依存した結果、授業内容、授業のやり方についてあまり研究していないこともあり、学習・教育の密度と自主性学習時間が結びつかず、学生にとっては「勉強して学んだ」という実感・体験を持ちにくいのが現状になっています。

さて、そのような環境の中で研究論文もどのような役割を持つべきかがこれから多いに議論されることになると思います。

私事ですが、大学院時代に論文を書いていた頃、担当教授に「すぐれた価値のある論文とは何か」と質問されたことがありました。答えに窮していると「良い論文とはオリジナリー性が高いこと、引用文献が少ない論文ほどオリジナリー性が高く、理想的には引用文献がない世界で初めての研究論文が最高である。又、多くの引用文献として利用される論文も価値のあるものである。」と明解に教えてくれたことが今でも記憶に残っております。

今回の紀要に収録された論文はいずれも極めて質の高いオリジナリー性を持った論文であり、本学教員の学究に対する真摯な態度がひしひしと伝わって感銘を受けます。各々の論文が学問の進歩に貢献し、教員各位の研究が教育に活用され学生諸君にも大いなる刺激になることを心より祈念し、また、大学紀要が社会に広く寄与することを期待します。